

遠藤周作 日本人を語る

|| 対話集 ||

ウィリアム・ジョーンストン 岩生成一 杉山博 加賀乙彦 芥川比呂志 北杜夫

遠藤周作 日本人を語る

|| 対話集 ||

ウィリアム

・ストーン 岩生成一

杉山博

加賀乙彦

芥川比呂志

北杜夫

小学館

遠藤周作 (えんどう しゅうさく)

1923年、東京都に生れる。慶応義塾大学文学部仏文科卒。

1951年、フランスに留学し、リヨン大学で現代カトリック文学を学ぶ。

1955年、『白い人』によって芥川賞を受賞。

主要著書

- 『フランスの大学生』(1953) 早川書房
『カトリック作家の問題』(1954) 早川書房
『白い人・黄色い人』(1955) 講談社
『青い小さな葡萄』(1956) 新潮社
『海と毒薬』(1958) 文芸春秋新社
『おバカさん』(1959) 中央公論社
『あまりに碧い空』(1960) 新潮社
『宗教と文学』(1963) 南北社
『わたしが・棄てた・女』(1964) 文芸春秋新社
『留学』(1965) 文芸春秋新社
『哀歌』(1965) 講談社
『沈黙』(1966) 新潮社
『影法師』(1968) 新潮社
『薔薇の館・黄金の国』(1969) 新潮社
『切支丹の里』(1971) 人文書院
『牧歌』(1972) 番町書房
『死海のほとり』(1973) 新潮社
『イエスの生涯』(1973) 新潮社
『最後の殉教者』(1974) 講談社

日本人を語る —遠藤周作対話集—

昭和49年12月30日 第1版第1刷発行 © 1974 —検印廃止—

著者代表 遠 藤 周 作
発 行 者 相 賀 徹 夫
発 行 所 (株) 小 学 館
101 東京都千代田区一ツ橋2-3-1
電話 東京(263) 2111 振替・東京200番
印 刷 活 版 足柄製版印刷株式会社
オフセット 東陽印刷株式会社
製 本 難波製本株式会社

Printed in Japan

造本にはじゅうぶん注意しております
が、万一、落丁、乱丁などの不良品が
ありましたらおとりかえいたします。

日本人を語る

— 遠藤周作対話集 —

目次

日本を考える……………ウィリアム・ジョーンストン…5

鎖国時代の日本人……………岩生成一…45

戦国時代の武将たち……………杉山 博……………87

留学体験を通して……………加賀乙彦……………127

演劇の魅力に憑かれて……………芥川比呂志……………167

日本人とユーモア……………北 杜夫……………207

《あとがき》…………………………250

対談者略歴…………………………252

装幀／むらいまつを

日本を考える



ウィリアム・ジョンストン

遠藤周作

戦後における日本の経済的発展のエネルギーは、生活の向上という外国人にとっては笑うべきイデオロギーに支えられたものであった。その結果としてもたらされた物質的繁栄のなかで、今、日本人は何か別のもので埋めなければならぬような空虚感に襲われているのではないだろうか。

敗戦直後の日本

遠藤 神父さん、日本へいらつしやったのはいつですか。

ジョンストン 一九五一年です。

遠藤 と言うと、朝鮮戦争が始まった翌年ですね。ぼくがフランスへ行った翌年だな。日本も幾分経済的に良くなってきたけれども、まだひどかった時代ですね。

ジョンストン もちろん、ひどい時でした。今に比べると、とてもひどいものでした。東京から広島へ行くのに十六時間ぐらいかかりました。

遠藤 まだ焼け跡などが残っていて、生活水準も低かった……。

ジョンストン 外人はとっても尊敬されましたね、今とは違って。(笑い)

遠藤 ちょうど普通になってきたわけですね、今は。ぼくが神父さんに伺いたいのは、神父さんが日本へ来られる前に考えていた日本と、一九五一年に来て見られた日本と、今の日本、つまり、二十年間そのなかで生活してきた日本及び日本人と、三つのプロセスがあるわけで、随分そ

れぞれ違っていると思いますが、日本へ来られる前はこういうふうに考えていらっしやったんですか。

ジョンストン 日本へ来る前に、私は図書館へ通って、一生懸命日本についての本を調べました。その時、アイルランドにはほとんど何もありませんでした。日本のことは少し、戦争の時から知っていました。私は北アイルランドにいました。北アイルランドのカトリックは、今と同じように、ものすごく英国に抵抗してましたね。戦争の時に、二隻のイギリスの軍艦が南太平洋で日本の飛行機にやられました。

遠藤 プリンス・オブ・ウェールズと、もう一つはレパレスでしたね。

ジョンストン はい。私たちのラテン語の先生が授業に来て、新聞を見せながら、二隻のイギリスの軍艦がやられた……。みんな拍手しましたね。

遠藤 ほう……なぜ？

ジョンストン イギリスが負けたからです。

遠藤 ああ、なるほど。北アイルランドではね。

ジョンストン だから戦争の時、もちろん日本のことを習いましたけれども、主に長崎のこととか、殉教者のこととか、そういうことだけしか知っていませんでした。そして日本に來ると、羽田に着きました。

遠藤 その時、日本語はしゃべれましたか。

ジョンストン もちろん、できませんでした。日本に来てから、横須賀で勉強しました。その時の日本は貧乏で、人が多いと思いました。非常に大きな印象を受けました。そして魅力的でした。

遠藤 どういうところが魅力的だったのですか、当時の日本で。率直に言わせてもらうと、ぼくらの子供の時の日本の自然とか風景はとても奇麗でした。だけれども、戦争によって目茶苦茶になったでしょう。だから、戦争が終わったからの日本は、世界のなかで風景も自然もいちばん汚い国になってしまったというのがぼくの考えです。戦後、日本に来た外国の人が日本が奇麗だと言うと、日本語でいう「眉に唾を塗って聞く」お世辞じやないか、ひとつも奇麗なことはいじやないかという感じがするんですが、本当に奇麗だと思いいになりましたか。

ジョンストン 奇麗というよりも、魅力的と言いますか……。

遠藤 エキゾチックということですか。

ジョンストン そうです、東洋的。

遠藤 エキゾチックと言うと、東洋のほかの国、台湾とか……。

ジョンストン 台湾には行ってません。香港はもつとエキゾチックだと思いますね。しかし、例えば着物であるとか、下駄であるとか、そして、もちろん使う言葉とか……。

遠藤 生活習慣がエキゾチックでしたか。

ジョンストン はい。しかし、今の日本は新幹線なんかあって、違う世界のようにです。

遠藤 その時、そういう点でいささか魅力がありましたか。

ジョンストン はい。変ったのは日本だけではなく、アメリカもですからね。

遠藤 世界じゅうそうですね。それから二十年間日本で生活して、ほとんど日本人と同じようになられてしまつて……。

ジョンストン そうですね。だから慣れていきますね。

遠藤 慣れてしまうと、あんまり魅力のある国ではなくなつたでしょう。

ジョンストン 「日本はどうですか」と聞かれますが、私はここの者ですから、「日本はどうですか」というのは可笑しいですね。

遠藤 そうでしょうね。本当にそうだろうと思ひますね。むしろアイルランドにお帰りになつたほうが、エキゾチックにお感じになるかもしれません。(笑い)

ジョンストン 私がアイルランドに帰つてから、ここの学生に会つた時「随分アイルランドは變つたでしょう」と聞かれます。だけれども、東京は一月でアイルランドの十年間よりも變ります。東京はいつも變ります。新しい駅を作る、新しい道路を作る。アイルランドはそれほど變りませんね。保守的ですね。

遠藤 そうでしょうね。例えば、そこに住んでいる人は變るけれども、建物はいつも同じですね、外国は大体。ところで、日本についてのイメージはかなり變りましたか。

ジョンストン もちろん。日本へ来る前に、雑誌などには富士山とか、着物とか、傘とかが載

っていましたが、それだけが日本じゃないということがわかりました。と同時に、日本は別な世界だということを感じます。去年、アメリカに半年いました。そして、アメリカから日本へ帰ると、やっぱり別の世界です。

遠藤 どういうふうに別の世界なのですか。

ジョンストン ことに対人関係だと思っています。日本人はそれほど感情を表わしませんね。アメリカ人はすごく表わします。

遠藤 ぼくなんか神父さんと長くつき合っていて、比較的に感情を表わすほうですし、ぼくみたいな日本人はたくさんいると思いますが、どこが違うのですか。

ジョンストン 例えば、サンフランシスコの飛行場を見ると、歓迎するときに、みんなこうやってキスなんかしているけれども、羽田で日本人はそうしません。

遠藤 それは習慣の違いですよ。

ジョンストン もちろん、表わし方だけで、それはわかります。

遠藤 しかし、そんなに違いますか。感情を出しませんか。

ジョンストン はい、違いますね。

遠藤 そういうのを御覧になると、嫌いやとお思になりますか。それとも、いいと思いますか。ジョンストン いいと思いますね。両方の文化が違うというだけだと思います。しかし、アメリカ人はその点から見ると、少し単純に見えますね。

遠藤 どうです、二十年間、神父さんが日本や日本人についてお考えになったことが、だいぶ変わってきているだろうと思いますが……。

ジョンストン もちろん。日本人はすぐ自信が出ました。それが主な違いじゃないかと思います。若い学生と話すと、よく外国へ行っていますね。そして帰ってからの結論として、日本のほうがいいのか、自信が出たとか、そういうことをよく言います。

物質的繁栄のなかの空虚感

遠藤 その自信というのは、どこにあるのでしょうか。例えば、ある意味では戦争中の日本人というのは、非常に自信があつたわけですよ。

ジョンストン しかし、日本人は負けたから……。

遠藤 負けるまではね。つまり、非常に戦争に強い国だという自信がありましたし、それから外国をよく知らなかったという理由もありますが、アジアのなかではいちばん西洋の文明——文化じゃなくて、文明を取り入れて強くなった国だという自信がありましたね。今はそのエコノミックな面で、これだけ復興したという自信ですよ。率直に言つて、神父さんがいらつしやつた一九五一年から今日までの間に、こんなになるとは日本人は誰^だも考えてはいなかったと思います。戦争が終つた時には、日本はもう駄目^{だめ}になつてしまふと思ひましたね。これだけ変るとは思ひなかつた。しかし、そういうエコノミックの形でプロGRESSした自信なんでしょうか。

ジョンストン そうだと思います。日本人のイデオロギーの問題じゃないかと思っています。

遠藤 イデオロギーは日本人にはないでしょう。

ジョンストン イデオロギーのない国には将来性がないと思います。

遠藤 私も同感です。

ジョンストン それはアメリカを見るとわかります。アメリカにモチベーションですか、動機だけがあつてイデオロギーがないから、今のようになつてしまったのだと思います。

遠藤 だから、政治はあるんだけど、政策がないんですよ、日本の場合は。それから、歴史というものの考えが日本人の頭にはないですからね。確かにヨーロッパやイギリスと日本は違ふんです。しかし逆に言うと、そういうイデオロギーや宗教がなかったことが、日本を戦後これだけ復興させたんです。なぜかと言いますと、ぼくは外国へ出かけまして、ヨーロッパは別ですけど、中近東なんか行きますと、なぜこんなに進歩しないんだろうと思いますね。やはり回教のせいですよ。だって、毎週二回安息日があつて、働いたらいけないというような、いろいろな宗教的な戒律がある。働きたくとも働けないように、宗教が制約している部分がありますね。それから、東南アジアへいらつしやつたらおわかりになります、仏教というものが彼らの近代的な進歩をある程度制約していることは確かですよ。

その点、日本人に宗教がないということは、非常にぼくは欠点だと思ひ、イデオロギーがないということも欠点だと思います。しかし、そのために働くために働くという新しいイデオロギー

が生れたと思うわけです。イデオロギーというのは、結局、幸福の概念でしょう。幸福というのは何かと言ったら、戦後の日本人にとっては普通、自分の家に電気洗濯機があつて、自動車があつて、そしてテレビがあつて、ということでしょう。イデオロギーがないから、すぐそれに向つて集中していったわけでしょう。つまり、お金を少しでもつくるのが幸せであるという考え方です。もし宗教があつたら、精神的なイデオロギーがあつたら、こういう考え方を制約する気があつたでしょうけれども、それがなかったから、そこへバツと集中していったわけです。

ジョンストン 日本人にはイデオロギーはなくても、日本に対する愛というのはすぐありますね。日本教ですね。自分の国に対する愛国心。

遠藤 けれども、戦後の日本人にとって最大のものは、貧しく惨めだったから生活の向上、これがイデオロギーになつたわけです。だから今日、これだけ経済的に豊かになつた。本当によく働くでしょう。日本人にはイデオロギーがないんじゃないやなくて、生活の向上という外国人が見たら非常に笑うべきイデオロギーが、日本を戦後、今日まで支配してきたと思うのです。

ジョンストン もちろん、日本の将来のために、もしあるイデオロギーを持ったリーダーがいれば、それもいいでしょうね。ポリティシヤンとステーツマンとは違うでしょう。ステーツマンですね。ところで、日本のリーダーのなかにキリスト教者がいますか。

遠藤 いませんね。日本の精神的指導者及び政治的指導者のなかには、キリスト教者はいないでしょう。だって、日本の精神的指導者というなかには、例えばどういふ人がいますか。池田大